

テスト問題分析に基づくイングランド歴史教育の学力構造

——現代社会理解と資料活用を志向する問題編成構造の解明——

就実大学

竹中伸夫

<キーワード>イギリス, 歴史教育, GCSE

I. 問題の所在

本小論の目的は、イギリス（イングランド）の歴史教育において育成が目指される学力の実態を、AQA（Assessment and Qualifications Alliance；多様な資格試験を作成・運営するイングランドの機関）のGCSE¹⁾（General Certificate of Secondary Education；中等教育資格試験、義務教育段階終了時（16歳）に、義務教育修了程度の認識を有していることを証明するために受験するもので、最終的にどのような学力を育成しようとしているかが最も端的に表れていると考えられる）という評価問題を手がかりに、問題の形式、および設問の配列の二つの観点から解明することである。

このような研究を行う理由としては、以下二点があげられる。一つはイギリスの歴史教育において育成が目指される学力の特質、およびカリキュラムの特質に起因する。筆者はこれまでカリキュラム分析を通じて、イギリスの歴史教育の特質の解明を試みてきた²⁾。分析の結果、イギリスの歴史教育は、何らかの歴史的事実に関する認識を育成するのではなく、歴史は解釈であるとの前提に立ち、歴史を分析的に把握する際の枠組みの発達と方法知（スキル）の獲得に特化しているとまとめられる。これは広い視野から考察し、偏見にとらわれることなく、証拠に基づいた自分なりの解釈を歴史において構築できるようにすることを目指しているからと考えられる。こうした学力の必要性は社会がグローバル化する現

在こそ増大していると考えられる³⁾ため、日本への示唆という観点からその解明が急務といえる。

しかし、イギリスにおいてはナショナル・カリキュラムが成立するまでは、地方の教育局や各学校長にカリキュラムの策定権限が与えられていたこともあり、カリキュラム成立後もその運用に関して、実践者の影響力が非常に強いことにその特質がある。よって、公的機関によって策定されたカリキュラムを分析するだけでは、イギリスの教育、なにかんづくそこで育成されている学力の実態を解明することは難しい。多くの学生が受験する評価問題⁴⁾から、より学力の実態に迫る研究が必要と考えられる。

二つは研究の不十分さである。GCSEを手がかりにイギリスの歴史教育を扱った先行研究として鋒山⁵⁾のものがある。「現代世界」の試験要項を事例に、問題の形式からイギリスの歴史教育における学力の実態の解明を志向したものといえる。

しかし、AQAのGCSEでは、各設問で取り上げられる個々の史資料そのものに関しては毎年変更するが、取り上げられる設問の項目自体に関しては、少なくとも2005年から2008年の間、変更はない。認識内容に関して重要な項目とそれ以外という明確な区別が存在する、ということであろう。よって、問題の配列と形式の両面から、イギリスの歴史教育が目指す学力の実態に迫る研究の必要があるのではないだろうか。

そこで本小論では、2007年に実施されたAQAの

GCSE 歴史を手がかりに、分析を行うこととした。試験は学年末に実施される筆記試験としてのペーパーテストと通常の授業時間内（KS4：14～16歳の2年間）におこなった活動や調査、実験などを評価するコースワークの2種類からなり、両方の点数を加算し、A～G（合格）までとN（不合格）の8段階で評価される。次項以降、ペーパーテストとコースワークそれぞれについて、分析を行う。

II. GCSE 歴史の全体構成

GCSE は、歴史などの教科目ごとに策定されており、受験生はそれらのテスト科目の中から必要な科目だけを選択するため、全員が歴史を受験するわけではない。また、2007年版の場合、歴史は History A, B, C の3種類が存在（AとBには、設定された問題の大半に解答するフルコース [Bには問題選択の仕方の違いからフルコースが2つ] と一部のみを選択するショートコースとが存在するため実質的には6種類）し、歴史の受験を希望する者は、そのいずれか1つを選択する。2007年版の GCSE 歴史の試験問題の一覧を表1として示そう。表1はホームページ等より訳出し作成した。紙幅の都合上、2007年版の GCSE 歴史の試験の全体構成については表1をご覧いただきたい。

III. ペーパーテストにおいて評価される学力

(1) 設問の形式分析—知識や資料の活用を評価する試験問題—

History C の問1の①「社会保障」の採点基準を手がかりに、ペーパーテストにおいていかなる学力を評価しようとしているのかを明らかにしよう。そのために表2を作成した。表2は筆者が作成したもので、表中の網掛け部分は筆者の分析に基づき、他はホームページなどからの訳出による部分を示す。

「社会保障」においては、4つの資料A～Dが提示され、その資料をもとに、4つの問題(a)～(d)に解答することが求められている。いずれも19世紀のイギリス社会の労働環境や条件の特質、およびその時期に登場した労働組合の活動や特質についての問題となっている。

問題(a)は19世紀の労働組合について書かれた専門書の一節(資料A)から、その時代に登場した新しい労働組合の主要な特徴を抜き出すことが求

められた問題である。4点満点でいくつかある主要な特徴それぞれにつき1点の配点となっている。資料から必要な情報を引き出すことができるかどうかを評価する問題といえる。

問題(b)はジョセフ・アークという労働組合の創設・運営にたずさわった人物の回顧録の一節(資料B)について、その人物が関与した全国農業労働者組合について研究する場合、その資料は役に立つか否か、という観点から評価することが求められている。その採点基準より、8点満点で4つのレベルに分かれており、その資料が一次資料であるといった自明の特徴によりその有用性を決定している場合かその記述内容そのものを引用するだけでその有用性を決定しているレベル1(1～2点)、その資料が一面的であるといった多少内容に踏み込んだ特徴から資料の有用性を評価している場合か記述内容の引用や自身の知識の援用に加え、簡単な類推や評価を伴っているレベル2(3～4点)となっている。この違いから、本設問が知識の再生ではなく活用を評価対象としていることがわかる。なぜなら、レベル1の解答は、資料から知識を抽出・再生するだけだが、レベル2に到達するためには、資料の有用性を決定するために、資料から得られた知識に基づく類推や評価といった活動がなされなければならないからである。

さらにレベル3(5～6点)になると、与えられた資料からは直接読み取れない既存の知識やその資料作成の動機などといった特徴をあげ、資料の記述内容との論理的整合性を吟味し、それに基づき資料の有用性を評価している場合が当てはまる。よって資料が直接示す内容の周辺領域についてある程度の知識が必要不可欠となってくる。そして最後にレベル4(7～8点)では、これまでのレベル1～3が資料の内容に基づく評価と資料の特質に基づく評価のいずれかであったのに対して、その両方の観点から有効性を評価している場合が当てはまる。

これらのことから、問題(b)では、資料などから得られた知識をただ再生するだけでは不十分である。それらをもとに類推や評価することが必要で、かつ自身の既存の知識をも活用し、問題において与えられた資料との矛盾や整合性について自分なりに吟味し、その結果を論理的に表現できなければならないといえるだろう。以上のことから問題(b)は

知識の活用を前提とした資料の論理的評価が下せるか否かを評価する問題といえよう。

こうした問題の特性は、問題 (c) にも当てはまる。というのも問題 (c) は、その時代の新聞記事の一節が示す解釈に対して、自分の考えを示すことが求められた問題であるため、問題 (b) とは多少異なる設問となっている。しかし、同時代人によって特定の見方（解釈）に基づき記述された資料であることに変わりなく、その資料が自身の見方（解釈）にとって有用か否かを評価する問題とみなすことが可能で、かつ解答例や採点基準を見る限り、(b) と同じ構造を持っているといえるからである。

最後に問題 (d) について見てみよう。問題 (d) は労働環境が劣悪でその改善にストライキが必要不可欠だったとする資料 A、労働環境は劣悪ではなかったとする資料 C、そして大規模なストライキがあったことを主張する資料 D、つまり一見すると矛盾する複数の資料を比較考量しながら、自身の解釈を構築することが求められた問題である。レベル 1 (1～3点) は与えられた資料から抽出した知識だけを列挙することによって解釈を行っている場合が相当する。またレベル 2 (4～7点) は抽出した知識をもとに論理的な類推を行い、その矛盾について何らかの説明をおこなっている場合、ないしは自身の知識によって解釈を行っている場合が相当する。最後にレベル 3 (8～11点) は、与えられた資料と自身の知識の双方を適宜利用し、解釈を行っている場合が当てはまる。実際に自分なりの解釈を構築することというように、解答の仕方こそ異なるが、問題 (b) や (c) を類似する構造を有しているといえる。

このようにみえてくると、問題 (a) は資料の活用ができるかを評価する問題、問題 (b)～(d) は、与えられた資料や自分の知識をもとに資料の有用性、解釈の妥当性、解釈構築を行うことが求められた問題といえる。また問題 (a) を除く 3 問は、確かにいずれも知識がなければ高得点を取ることはかなわないが、単純に知識を有していれば高得点を取れるというものではなく、解答のために、既存の知識に基づく論理的な類推（活用）を行うことができるかが評価の対象となっているといえよう。こうした問題の傾向は History C のほかの問題や History A, B にも共通する。GCSE では、歴史は解釈にすぎない

いの前提に立ち、有用な資料から必要な情報を適宜引き出し自分なりに活用し、解釈できるかが評価の対象になっているといえる。

(2) 問題の配列分析—特定の研究視点に基づく歴史の解釈—

それでは、どのような研究の視点、歴史事象についてのテストとなっているのだろうか。本節以降では、こうした疑問にこたえるべく、表 1 をもとに問題の編成原理について分析する。なお、以降の分析では、ショートコースとフルコースは区別しない。

まず、どのような研究視点に基づく研究を行わせているかについて見てみよう。結論からいえば、GCSE は、複数の事象の差異を分析しそれを時間の経過に伴う変化として析出させる研究と複数の事象の関連性を分析しそれを因果関係として析出させる研究、すなわち変化（相違）と因果（構造）という 2 種類の異なる分析を行わせる問題で構成されているということがわかる。これら 2 つは歴史家が歴史を研究する際に用いる、全く異なる操作を用いる必要のある、異なる研究視点といえよう。以下 History A, B, C それぞれについて、順に見ていこう。

i) History A の場合

History A は問 1 が変化の問題、問 2 が因果の問題となっている。すなわち、問 1 の①は 19 世紀における麻酔の説明とそれに伴う外科手術の進歩（変化）について説明することが問題の主題である。つまり、ある要素（手術）の短期的変化とその要因（麻酔）についての問題であるといえる。同様に②も、イスラム帝国下での医薬品の進歩（変化）とそれに寄与した医師（要因）についての問題とペニシリンの発見・生成（変化）における偶然（要因）について問題であるため、ある要素の短期的変化とその要因についての問題といえる。また③は、ローマ帝国統治期と中世、19 世紀と 20 世紀というように 2 つの時代のイギリス社会を取り上げ、それぞれの社会における公衆衛生という特定のテーマについての相違とその時間的変化についての問題となっている。このように問 1 は、どの問題においても、日常生活において不可欠かつ歴史を通じて長期的・漸進的に変化の認められる衛生面というテーマについての変化やその原因を取り上げている。

他方問2は、19世紀後半のアメリカ、19世紀前半のイギリス、16世紀後半のイングランド、20世紀前半のドイツという4つの国や地域について問題の中から任意の1問を選択することとなっている。これら4つの国や地域に共通するのは、いずれもその国や地域内部に何らかの対立を抱えていたという点である。すなわち漸進運動に伴う先住民と白人の対立、資本主義化に伴う労働者と資本家との対立、国教会とカトリック、清教徒間の宗教対立、ナチスと反対勢力という具合である。問2は、これら対立状況にあった国や地域について、どのような時代だったのかを①で概観させ、②と③でなぜ対立していたのかを中心としながら、その時代の個別の出来事についての因果関係を把握させる問題構成となっており、対立がおきていた地域・時代の構造の把握を志向する問題となっているといえよう。

ii) History B の場合

次に History B について見てみよう。B は問1が因果の問題、問2と問3が変化の問題となっている。まず問1の①～⑥は相次ぐ世界大戦など、戦争の世紀としての20世紀を形成する一要件としての個別事象を、年代順に配置した構成となっており、その中から2問に解答させることで、20世紀に起こった個別の事件の因果律を分析し、20世紀における対立原因やその構造を把握することで、戦争の世紀という20世紀の時代構造についての全体像を把握するための問題となっている。対して、そのような戦争の世紀の中で自国はどのように影響を受け、またどのように関与し、どのような帰結を迎えたのかを把握することを可能にしているのが、⑦と⑧である。いわば戦争の世紀について一国の視点から把握するための問題といえる。このように問1は、総論と各論の2つの観点から、20世紀の時代構造をとらえさせる問題となっているといえよう。

一方で問2と問3について見てみよう。問2はロシア／ソ連、ドイツ、アメリカ、ブリテンといった国と地域が、20世紀前半においていかなる行動をとったかを考えさせる問題である。そのテストにおいて問われている行動の内容について見ると、前半の①～④まではロシアからソ連建國へと至る過程など政治的な内容について問題となっており、そのような政策によってその国や周辺国・関連国の政治情勢がどのように変化したかについて問われている。対

して、後半の⑤～⑧は、アメリカのニューディール政策など当時のその国の社会・経済状況に起因し、その後の社会・経済状況に影響を与えた政治的行動についての問題となっており、自国の社会・経済状況がどのように変化したかについて問われている。このように問2は、政治と社会・経済の2つの観点から、20世紀前半の諸国の変化について考えさせる問題といえる。

最後に問3だが、前半の①～③が自国に関する問題、後半の④～⑥が外国に関する問題となっている。これらの問題で問われている内容は、いずれも自国や世界において解決が求められる課題であるといえる。例えば②では20世紀におけるブリテンとアイルランドについての問題となっており、対立の解消・終結という自国において解決が求められる問題が、今世紀を通じてどのように展開して現在にいたっているかについての問題といえる。同様に⑤も第2次大戦後の中東情勢についての問題となっており、現代世界において頻発する宗教対立や民族自決に起因する紛争の一事例であり、そういった紛争発生メカニズムなどについて歴史的に解答させる問題となっている。つまり、問3は自国あるいは世界的な課題がどのように発生し20世紀を通じて変化してきたかについて考えさせる問題といえよう。

iii) History C の場合

では History C はどうだろうか。C は問1が因果の問題、問2が変化の問題となっている。すなわち、問1は下位の問題が7つ用意されている。これら7つにおいて出題されている事項を見てみると救貧法(②)、チャーティスト運動(④)というように、いずれも19世紀に起こった社会政策や福祉政策、それに付随するさまざまな社会運動となっている。各設問においては、先の主題の原因や影響について因果的に学習することになっており、19世紀におけるこれらの主題として挙げられた事項の成立・展開によって、20世紀イギリス社会の特質の1つでもある修正資本主義国家、福祉国家イギリスの礎が構築されたことを考え合わせれば、このような主題について因果的に解明させることで、社会の福祉国家化への道を歩みはじめたイギリスという、現代社会の特質を念頭に置いたその時代の構造の解明が可能な問題となっているといえよう。

他方問2だが、そこで問われている主題をより詳

細にみてみると、例えば②の産業では18世紀から19世紀にかけて、産業革命や機械化などによって需要が増え、製鉄業が発達したことについての問題となっており、③の輸送では、全国に鉄道網が敷かれ、それによって日常生活だけでなく産業の発達にも寄与したことについての問題となっている。このように、どの問題も18世紀から19世紀にかけての特定のテーマの変化についての問題であり、いずれもイギリス社会の産業社会化（工業国イギリスの誕生）に伴う社会の諸側面の変化についての問題といえる。よって、19～20世紀イギリス社会の特質の1つでもある先進工業国イギリスの礎がどのようにして歴史的に構築されてきたか、現代社会の特質がどのように歴史的に形成されてきたか、の解明が可能な問題となっているといえよう。

以上のことから、どの問題にも変化を解明する問題と因果関係を解明する問題とが用意されている。前項において解明されたように、有用な資料から必要な情報を適宜引き出し自分なりに活用し、解釈できるかが評価の対象となっていることと考え合わせれば、GCSEにおいては複数の事象を比較分析することによって明らかになる変化と複数の事象の関連性を分析することによって明らかになる因果関係の2つの研究視点から歴史を研究・解釈できるようになることが求められているといえる。

（3）問題の配列分析—現代社会理解のための問題編成—

それでは、どのような歴史事象について研究をかわせる問題の編成となっているのだろうか。

まず History A は、問1において、医薬品という日常生活に深く結びついたテーマについて、地域を限定することなくすべての時代からとりあげている。日常生活に深く結びついたテーマ（社会史）を取り上げ変化について研究させることで、短期的な変化と政治史では困難な長期的な変化の両方について考察が可能となる。つまり、変化という研究視点に基づく歴史研究を行い、その分析視点を獲得させるために問題が設定されているといえるのではないだろうか。他方問2においては、近代以降において内部対立を抱えていたという共通点のある、4つの国や地域の中から選択し、因果関係に関する分析を

行うこととなっている。対立が起きているということは、少なくとも推進派と反対派という異なる立場に基づく一次資料が存在しているとともに、対立解消に向けて社会が大きく変容した時代とみなしうる。以上のような特質を踏まえた社会の構造の把握を行わせたならば、事象の因果的な把握による社会の構造的変革という分析が行いやすく、その事象に対して多面的な解釈が可能となろう。よって、因果という研究視点に基づく歴史研究を行い、その分析視点を獲得させるために問題が設定されているといえよう。このように、History A は、現代社会の分析にも応用可能な、比較にもとづく変化把握と因果にもとづく構造把握という分析視点の獲得を目的としたテスト問題といえよう。

次に、History B について見てみよう。前項の分析より、History B が地域の差こそあるがすべて20世紀の事象であることがわかるだろう。また解答に際して、戦争の世紀という時代の特質、その時代の政治・社会・経済状況、課題の3つに関して自国と他国の両方の問題に答えることが求められている場合が多い。こうした解答をするにあたって、受験生は同時代的多様性を理解しておく必要が生じる。このことから多様性をもち相互に関連しあった現代世界そのものの理解を促すことを目的としたテスト問題といえよう。

最後に、History C についてである。前項の分析より、History C が時代の差こそあれ、すべて自国の事象であることがわかる。加えて、多数存在する自国に関する事象のうち、問1は福祉国家イギリスという、現在岐路に立たされている自国の特質の1つに関する事象ばかりで、それらを因果的にとらえさせる問題となっており、また問2は工業国イギリスという、世界的にみると相対的にその地位が低下しつつあるが、自国の特質の1つに関する事象ばかりとなっている。これらのことから、現在の自国の特質、特に現在失われつつある特質、の理解のためのテスト問題となっているといえるだろう。こうした特質を取り上げることで、現在の社会の在り方を批判的に考察する機会ともなろう。

このように、History A, B, C でそれぞれ方法は異なるが、現代社会理解を念頭に置き、そこに何らかの方法で寄与しうるような問題構成となっているといえよう。

IV. コースワークにおいて評価される学力

(1) コースワークと評価対象としての学力の特質

コースワークとは、通常の授業時間内（KS4：14～16歳の2年間）におこなった活動や調査、実験などを現場の教師がAQAなどと協議しながら評価するものである。その際の詳細な調査テーマに関しては、特段の指定はなく（ただし、調査テーマの具体例は報告書などで公開されており、かつ決定した調査テーマを評価機関に報告・了承を求めなければならぬので、まったくの自由というわけではない）、大まかな研究領域として、Aが地域史と現代史、Bが自国史、Cが自国史と地域史というように、学習者にとって空間的・時間的に比較的身近な領域が選択されているのみである。こうした地域や時代が大まかなテーマとして指定されている理由は、学習者が実際に調査をしようと考えた時に、実地調査が可能であり資料も豊富で入手しやすい対象であるからと思われる。

調査テーマの自由度から、具体的・個別的な知識の有無を評価するものではなく、むしろ研究主題を自分で設定しその主題に応じた調査・研究を組織的に企画・実施できるか、その調査した内容を批判的に吟味し、論理的に説明できるか、というように、実際に歴史に関する研究論文を書かせる過程の中で、研究に必要なさまざまな能力・技能を評価しようとしているのではないかと考えられる。

(2) コースワークの評価基準

前項において確認したコースワークの評価問題の特質を踏まえ、コースワークの評価基準を見てみよう。そのために表3を作成した。表3はHistory Cのコースワーク用の評価基準を筆者が訳出したものである。History Cには「地域史」と「変化するイギリス社会」という2つの課題が設定されており、各25点満点で、配点の違いによって2つのモデルがある。

表3によれば、コースワークの評価に際しては、観点が3つ設定されている。観点1「過去に関する記述、分析、説明」、観点2「文脈に合わせた歴史的資料の批判的活用」、観点3「解釈や記述命題の理解、分析、評価」がそれである。その配点としては、観点1が6割、観点2と3が合わせて4割となっている。それぞれの観点は4つのレベル（レベル1：

基本的な理解／記述からレベル4：複雑な理解まで）に分けられている。

観点1は、引用した資料と自身の記述した文章との論理的関係性が低い場合レベル1と判定され、単純ながら明確な論理性が認められる場合がレベル2、複数の要素における多様な結びつきを整理し、明確に記述した場合がレベル3、明確に記述したうえで自分の知識をもとにした論理的な判断（主張）ができた場合がレベル4となる。レベル3と4の間の差異を、説明＝事実に基づく正解のある客観（体的）な説明、判断（主張）＝事実に基づく正解のない主観（体的）な説明、と解釈すれば、レベル3に対しレベル4はより高度な説明を行っていることになるため、観点1の評価基準は、論理的な説明の度合いに応じていると判定できる。

同様に、観点2は、研究主題について記述するために資料から必要な情報を抽出できた場合がレベル1、研究主題について記述するために資料を批判的に吟味し、選択的に活用できればレベル2、資料を活用する際の問題性も意識しながら資料を活用できればレベル3、レベル1～3までの技能を応用的に用い、過去を解釈できればレベル4となる。観点2の評価基準は、資料活用の難易度に応じていると判定できる。

最後に、観点3について見てみよう。観点3は一見するだけで、わずかにレベル4に多少の違いが認められるだけで、観点2とほとんど同様の構造をしていることがわかるだろう。すなわち、研究主題について記述するために解釈から必要な情報を抽出できた場合がレベル1、研究主題について記述するために解釈を批判的に吟味し、選択的に活用できればレベル2、解釈を活用する際の問題性も意識しながら解釈を活用できればレベル3、レベル3を発展させ、より多面的・多角的に解釈を活用する際の問題性も意識しながら解釈を活用できればレベル4となる。観点3の評価基準は、解釈活用の難易度に応じていると判定できる。

以上のことから、「論理的な説明ができること」、「必要に応じて資料を活用できること」、「解釈を批判的に吟味できること」の3つの能力の到達度合いに応じた評価の基準となっているということが、コースワークが到達基準から読み取れるだろう。

V. 結語

本小論の目的は、イギリスの歴史教育において育成が目指される学力を AQA の GCSE という評価問題をもとに、具体的に明らかとすることにあった。

分析の結果、歴史は解釈であるとの前提に立ち、ペーパーテストにおいては、歴史に関する何らかの事実を習得・暗記させるのではなく、現代社会理解に何らかの形で寄与する問題について、因果と変化という特定の研究視点に基づき、広い視野から考察し、偏見にとらわれることなく、証拠に基づいた自分なりの解釈を歴史において構築できるようになることを評価対象としており、またコースワークにおいては、歴史に関する研究論文を書く過程で必要なさまざまな能力・技能を評価対象としていることが明らかとなった。本小論のように、イギリスの歴史教育に関して、評価問題の構成をも踏まえ、同国の学力の実態を具体的に解明することを目指した研究は、管見の限り確認されていない。

こうした特徴はナショナル・カリキュラムに基づくものと判断できる。ペーパーテストやコースワークにみられる特定の研究視点や採点基準が、カリキュラムの到達目標の構造⁶⁾に合致していると判断できるためである。しかし、現代社会理解のためという内容に関する規定はカリキュラムには見られない。

イギリスの教育界の実情を考えると、ナショナル・カリキュラムを分析するだけでは、育成が目指される学力実態を明らかにできないという特質がある。そもそもナショナル・カリキュラムが示すように方法知に特化した学力の育成を目指すなら、テストの問題（項目）には全くこだわりがないはずである。にもかかわらず項目が変化していないということは、カリキュラムが目指す学力であるところの方法知に加え、内容としてある種の問題（項目）を理解させることの必要性を認めているからではないだろうか。評価問題を提示し、その基準や規準に内在する構成原理を分析するということは、意図されたことがどのように消化され、どのように実施されたかを踏まえて、川下から遡及しながらカリキュラムや授業を研究することに他ならない。こうした研究は、イギリスの歴史教育に限らず必要となろう。

【註】

- 1) http://web.aqa.org.uk/admin/qp-ms_gcse.php
- 2) 拙稿「歴史教育内容編成の構造と原理－イングランド、91年版ナショナル・カリキュラムを手がかりとして－」『社会科研究』2005年、pp. 31-40。
- 3) 田淵五十生「国際理解教育・グローバル教育の研究」全国社会科教育学会『社会科教育学研究ハンドブック』明治図書、2001年、pp. 404-413、参照。田淵は同論文で広い視野からものごとが考えられる人、偏見にとらわれず公正な判断のできる人、すなわち「存在する国際人」こそが、求められる市民像であると主張する。イギリスの歴史教育の学力は、この「存在する国際人」に相通ずるものがあると考えられる。
- 4) 鈴木秀幸「観点別評価－イギリスの教育改革に学ぶ－第1回『GCSE 試験における評価の統一』」『指導と評価』42-2、pp. 40-44。
- 5) 鋒山泰弘「試験の形態と学力の質－イギリスの一般中等教育資格試験（GCSE）の歴史の場合－」天野正輝編『教育評価論の歴史と現代的課題』晃洋書房、2002年、pp. 115-130。
- 6) Department for Education and Employment, *History The National Curriculum for England*, The Stationary Office, 1999.